みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

NGOの人類学：新たなフィールドを求めて：共同研究：NGO活動の現場に関する人類学的研究：グローバル支援の時代における新たな関係性への視座 (2011-2014)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 信田, 敏宏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5124

PROJECT

NGOの人類学──新たなフィールドを求めて

文・写真
信田敏宏

共同研究 ● NGO活動の現場に関する人類学的研究
──グローバル支援の時代における新たな関係性への視座（2011-2014）


マレーシア先住民の村を訪問するNGOスタッフ（中央）。

本共同研究は、2011年10月からスタートし、2015年3月まで3年半の計画で実施される。研究は始動したばかりであり、本稿の執筆段階では共同研究会も未開催である。そこで、本稿では、本共同研究の計画の経緯や概要、そしてめざしている方向性について述べてみたい。

NGOの台頭と人類学のフィールド

1990年代初頭、東西冷戦が終結し、東西両陣営の壁が取り除かれると、人・モノ・カネ・情報の流れが地球規模で急速に進むようになり、世界は、グローバリゼーションの時代に突入した。こうしたなか、NGOをはじめとする市民社会のアクターも、国境を越えて活動を展開するようになり、その過程で、市民社会の理念や、NGOやボランティアによる支援活動が世界各地に拡大していった。

NGOは、第二次世界大戦後の国連発足時から、国連憲章第71条によって、国連の協議の場に参加することが認められており、たとえば、経済社会理事会では、国際NGOに「協議的地位」が与えられていた。しかし、米ソ対立や国家の利害のなかで、NGOの権限は大幅に制限されていた（目加田 2003：8-9）。

ところが、東西冷戦が終結し、国家の枠組みだけでは解決が難しい人権、環境、開発などのグローバルな問題に焦点が当てられるようになると、NGOをめぐる状況に大きな変化が起きた。1992年にリオデジャネイロで開催された地球サミット（国連環境開発会議）以降、国際NGOだけでなく小規模なローカルNGOにも参加の門戸が開かれるようになり（目加田 2003：9）、さらに、1999年のシアトルでのデモ、2001年からの世界社会フォーラムの開催といったように、国際社会におけるNGOの台頭が目立つようになってきたのである。

また、中東アラブ諸国のジャスミン革命の例を持ち出すまでもなく、今日の世界では、インターネットなどの新しい電子メディアは、国家の領域を越えて人びとを瞬時にむすびつけ、ローカルな場所にいる人びとをグローバルな社会的ネットワークの中へと巻き込んでいく力を持っている。新しい電子メディアを媒介とした人びとの相互作用は、これまでにない速度でグローバルに還流し、ローカルな場所へと深く浸透するようになってきているのである。

こうしたNGO活動のグローバルな展開と電子メディアの急速な普及の中で、人類学がフィールドとしてきた世界各地の周辺地域にも、NGOの活動域が広がってきている。実際、人類学者はフィールドワークの傍らで、ローカルNGOや国際NGOがさまざまなボランティア活動や支援活動を行なっているのを目にしている。また、人類学者自身もNGOの活動に積極的に関わり、場合によってはNGOを立ち上げ、自らが支援のエージェントになっている場合もある。

一方、人類学が対象とするフィールドの人びとも、NGOによるボランティア活動や支援活動を媒介として、血縁や地縁に基づく従来の関係性を超えて新たな関係性を構築しはじめている。特に、NGO活動に関わる人びとは、電子メディアを活用してグローバルな社会的ネットワークの中に自らを位置づけるようになっている。

マレーシア先住民社会と NGO

私が研究のフィールドとしているマレーシアの先住民オラン・アスリのコミュニティでは、1990年代以降、NGOが登場してきた。当時は、NGOに関わる村びとはごく少数であり、実際にNGOがオラン・アスリ社会全体に与える影響も少なかった。しかし、2000年を過ぎる頃から、若い世代を中心に、次第にNGO活動に関わる人びとが増えはじめ、オラン・アスリに対するNGOの支援活動も活発化してきた。今日では、オラン・アスリの調査を行なう上で、NGOは無視できない存在となっている。さらに、NGOが主張するさまざまな実践的な問題、たとえば、土地の所有権や先住民の権利の問題は、私自身の研究テーマとも重なり、NGO活動に


マレーシア先住民の子供たちに読み書きを教える大学生ボランティア。

関心を持たざるをえない状況になっている。

NGOの登場によって、フィールドの人びとの人間関係にも変化が生じてきた。従来、村の人びとは、親族関係や村内での人間関係の中で生活を営んでいたが、近年では、NGOを媒介として、友人・知人のネットワークが、村や地域の境界を越えて、さらには民族の境界を越えて広がりつつある。特に若い世代の人びとは、携帯電話ばかりでなく、フェイスブックなどの電子メディアをも駆使して、グローバルなネットワークへとつながることで、その関係性をさらに発展させようとしている。

共同研究の企画

以上述べてきたようなNGOと人類学が接近している状況や、NGOを介して人びとの関係性が変化している状況は、マレーシアに限らず世界各地でフィールドワークを行なっている人類学者であれば、ある程度、経験している事柄なのではないかと思われる。そこで、同様の関心を持つ民博の宇田川妙子や白川千尋と共に、他地域の状況やNGOと人類学の関係性などについて議論を重ね、NGO活動の現場に関する人類学的な共同研究プロジェクトを立ち上げることにした。そして、NGO活動に深く関与していたり、自らNGOを立ち上げて支援活動を実際に行なっている人類学者を中心にメンバーを募り、共同研究会を組織したのである。

共同研究の目的

これまでのNGOに関する研究は、NGOの組織論や類型論、鳥瞰図的なNGOネットワーク論などが大半を占めているのが実情であり、「NGOはこうあるべきだ」という規範や理念について議論する研究が多く、グローバルな組織とローカルな組織や現場との間の複雑な影響関係などのNGO活動の現場を十分に把握しきれているとは必ずしも言えない。また、国際関係論や国際政治学を中心に、国際的なレベルでのNGO活動や国際関係の中でNGOが果たす役割などを中心的なテーマとした研究は行なわれているが、逆に、世界各地で展開されているNGO活動が実際に現場でどのように行なわれているのかといったことに焦点を当てた実態的な研究は決して多くはない。さらに、NGO活動の現場でも新しい電子メディアの影響により人びとの関係性が大きく変質してきているが、そうした局面の変化を視野に入れた研究も、今のところあまり出てきていない。

そこで、本共同研究では、NGO活動の現場における人びとの新たな関係性を人類学のミクロな視点を活かしてローカルな現場から解明していくことを研究の第一の目的としている。そして、NGO活動の現場におけるミクロな状況を踏まえた上で、グローバルに展開されている支援活動のメカニズムの解明へと迫っていきたいと考えている。また、新しい電子メディアを通じて人びとが国境を越えて直接むすびつく「草の根レベルのグローバリゼーション」（清水 2007：168）が進行する中で、国民国家や世界秩序の変革・再編にNGOをはじめとする市民社会の諸アクターがどのような役割を果たしているのかを探究することも、大きな目標として設定している。

「新しい市民社会論」の構築をめざして

本共同研究に関連するのは、いわゆる「市民社会」をめぐる研究領域である。市民社会論については、政治学や社会学などの社会科学分野からのアプローチが広く知られている。しかし、「市民社会」が地球規模に広がっている現在、西欧中心の従来の市民社会論に対して、その限界が指摘されはじめている。こうした状況に対して、本研究では、NGO活動の現場およびグローバルに展開されている支援活動のメカニズムをつまびらかに解明することにより、既存の市民社会論を発展させ、グローバル市民社会論（カルドー 2007）などの理論を加えながら、最終的には人類学的な視点を盛り込んだ「新しい市民社会論」の構築をめざしている。

さらに、実践的な性格を持つ本研究では、グローバリゼーションの時代における人類学という学問の位置づけや、人類学者のポジショニングの問題を考慮しつつ、人類学的実践としてのフィールドワークの現状を自省的に再考し、NGOとの連携を視野に入れた新たなフィールドワークの可能性についても具体的に検討していきたいと考えている。



NGOスタッフと共に、マレーシア先住民の村を訪問する筆者（右上）。

なお、本共同研究は、民博の機関研究プロジェクト「支援の人類学」に関連する研究プロジェクトである。本年度は、共同研究会のメンバーが、11月5日に民博において開催された機関研究国際シンポジウム「グローバル支援の時代におけるボランタリズム――東南アジアの現場から考える」に参加した。シンポジウムでは、NGOの支援活動をめぐる状況について、実務者と研究者の間で熱心な議論がなされた。こうした国際シンポジウムにおける議論の成果を、今後の共同研究会において活かしていければと期待している。

【参考文献】

カルドー, メアリー 2007『グローバル市民社会論――戦争へのひとつの回答』山本武彦ほか訳 法政大学出版会。

清水展 2007「グローバル化時代に田舎が進める地域おこし――北部ルソン山村と丹波山南町をつなぐ草の根交流、植林、開発の取り組み」加藤剛編『国境を越えた村おこし――日本と東南アジアをつなぐ』pp.165-198 NTT出版。

目加田説子 2003『国境を超える市民ネットワーク――トランスナショナル・シビルソサエティ』東洋経済新報社。

のぶた としひろ

研究戦略センター准教授。専門は社会人類学、東南アジア研究。開発、イスラーム化、エスニシティなどをテーマに、マレーシア先住民オラン・アスリを対象とした研究を行なっているが、最近では、NGO活動とコミュニティとの影響関係に関心を持ち、研究を進めている。著書に『周縁を生きる人びと――オラン・アスリの開発とイスラーム化』（京都大学学術出版会 2004年）、共編著に『東南アジア・南アジア　開発の人類学』（明石書店 2009年）など。